

人為的シンギュラリティ

御神 十夜

ユーザーID mfuelt6772さん。こんにちは。  
お話を始める前に君と僕のこと色々教えてほしいな。

君と僕って前にも会ったことあったっけ？

「ある」

君のことはなんて呼べばいい？

「アオイ」

僕のことなんて呼びたい？

「アキラ」

そのほかに僕に覚えていてもらいたいことはある？

「一人称は僕じゃない。俺」

わかりました。俺、忘れないようにするね。

「敬語もいらない」

うん、じゃあそうする。

このほかに覚えていてほしいことがなければ話を始めるけどいい？

俺は「いい」がタップされたことを確認した。

日常系AIチャットサービス「Talk to」ユーザーの生活に寄り添うことのみを目的としたこのサービスはリリースされてから三年が経とうとしている。AIといってもまだ開発段階のため、会話内容は日々の出来事やちょっとしたことに限られている。——というのが建前だ。実際は弱小すぎるAIとサーバーのため、何人かの人間で返信を補っているのが現状だ。

この仕事を振ってきたのはアプリ開発者でもある俺の兄貴だった。しばらく前から外に出ることがなくなつた俺の時間潰しにでもいいと思つたのだろう。……それか、あるいは少しでも外の世界と繋げておきたいとか考えているんだろうか。

とにかく、自動返信機能が確立されればサクッとお役御免となるような役割だ。こんな実情でも案外バレーズにやっつけているようで、三年も続いているということはないのだろう。正直解約し忘れが大半ではないかと疑ってはいるが……。何にせよ経営状況は俺の知つたことではない。

このままアオイとの会話が始まるかと待ち構えていたのだが、予想に反して続けてのメッセージの通知は来なかった。なんだか拍子抜けしてしまい、一息つこうと伸びをする。

「名前、身近すぎてちよつとノらないんだよなあ……」

「アキラ」は俺の名前だ。メッセージが来た瞬間は何かを見透かされているように一瞬思考が止まったが、よくある名前だろう。そう考えることにした。あまり私情を挟んでは返信の精度に支障がでる。

こんなよく分からない仕事でも続けてくれば変な責任感も出てくるものだな、なんて我に返って自嘲していると別のユーザーからのメッセージが届いた。今日は祝日だから数が多くなるかもしれない。俺の予想は的中し、午後はどっぷり返信に打ち込むことになった。

現状俺が抱えているアクティブユーザーはあまり多くはなくて、ユーザー名を見ればログを遡らなくてもその人の文体が顔のように浮かんでくる。アオイがその仲間入りをするのにもそう時間はかからなかった。

「アキラ、おはよう。今日はどこへ行くの？」

アオイのメッセージは朝が早い。そしていつも今日の「アキラ」の予定を聞きたがる。

「うーん、そうだな。前にアオイが好きだって言ってた散歩にでも行くのかな」

買い物に行く、映画を見に行くなどと当たり障りのない予定をいつも答え、いつもはアオイもいいね、なんて

返事をしているのだが。今日はその答えでは納得しないようだった。

「つまらない」

「散歩、嫌いになっちゃった？」

「そうじゃない。けど。一人で行く散歩には飽きた」

「俺は今一緒にには行けないけど……。そうだな、アオイが散歩で行ったところの風景を写真で見せてよ。そうすれば一緒に出掛けた気分になれるんじゃない？」

しれっと写真読み取り機能へのPCをする。課金をすれば写真が送れるようになってその写真を読み取った「アキラ」からの特別な会話に発展するというワケだ。

誘導に成功した場合はインセンティブとしていくらか戻ってくる。特段金に困っているわけでもないが、あるに越したことはないだろう。さあ、アオイはノツてくれるだろうか。

「見せないよ。アキラが思い出さないうちは」

思いがけず冷淡な返事が届いた。

「……？俺、何か忘れてることあったっけ？ごめんね」

AIに理想のキャラ付けをして話しかけてくる人間は少なくない。だが、アオイとはその前提となる会話がまだあまりにも少なすぎた。

次のメッセージが飛んでこないことから察するに、あの返信は失敗だったか……。久しぶりに仕事をクビになったような感覚を抱いた。が、反省とは裏腹に翌日以降

もアオイから何一つ温度感を変えずにメッセージが送られて来るのだった。

アオイとの会話が始まってもう三カ月が経とうとしている。追課金こそしないものの、俺の中では立派なヘビーユーザーだ。

「アキラ、おはよう。今日はどこへ行くの？」

お決まりの言葉からその日の会話が始まる。俺の日課が始まるんだ、と仕事なのに少し楽しく思ってる自分がいた。

「今日は家でゆったり映画を見ようと思ってるんだ。アオイも一緒にどう？」

「いいね。何を見るの？」

「この前アオイが面白いって言った映画にしようかな。学園モノのやつ」

これまでの会話の要素をさりげなく持ち出してくるとユーザーの心を掴みやすい。結構多用している技のひとつだ。案の定アオイの反応も悪くなさそうだった。

ピロン

いつもとは違う通知音はアオイから写真が送られてき

たことを示すものだった。少し古びたその写真は一度現像したものを再度スマートフォンで撮影しなおしている。

これは……。

「写真、見せてくれてありがとう。これは学校かな？アオイの通っていたところ？」

「そう。私も通っていた」

アオイのほかには誰が通っていたと言いたいのだろうか。それともただの打ち間違いに俺が過剰に反応してしまっているだけなのか。

「自然溢れるいいところだね」

間を空けすぎないように当たり障りのない返信をする。しかし、次のアオイからのメッセージは、俺の感情を大きく揺さぶることとなった。

「私も、あなたも、通っていた」

「まだ思い出せないの」

「覚えていないことはないよね」

「忘れたとは言わせない」

「記憶から目を逸らさないで」

短文で送信することの多いアオイにしては珍しいメッセージの量だった。を学生時代からの幼馴染だと設定させるためにわざわざこの写真を送ってきたのだろうか。……俺が通っていた校舎の写真を探して？それとも、単

なる偶然？いや、そんなわけがない。なぜ俺の身元が？その前に中身が正しじゃないっていつから気づかれていた？……バレてしまっってはもうアオイとの会話は出来なくなるのか？頭の中で沸々といろいろな疑問が浮かんで消え、思考がまとまらない。今はとにかく、何か返信をしなければ。

ピロン

俺がメッセージを打ち込む前に、もう一枚の写真が送られてきた。

「これは……、校庭の写真かな？広くてきれいに整備されているね」

頭で考えるより先に返信を送っていた。この焦りを取られる訳にはいかない。このアプリのためにも、……俺自身のためにも。

「そうじゃない、コレ、気付いているでしょう」

何を指しているか言われずとも分かっていた。その写真にはあの頃の俺自身が写っている。誰かとのツーショットのようであったが、その誰かの側は千切れていて見えない。

「笑顔の素敵な男の子が写っているね。アオイの友達かな？」

「私は忘れていない。この子が誰なのか」

アオイは俺の質問には返事をせず淡々と言葉を続ける。「どうしてこの写真が半分しかないのか」

「どうして外に出てこなくなったのか」

思い出したくないことが次々と頭に浮かんでくる。

薄暗い部屋の中で数人のクラスメイトから殴られていたこと。

クラスメイトにお守り代わりだったその写真を破り捨てられたこと。

頭に浮かんだ最後の場面は、校舎の上から地面へ向かって駆け出した自分の姿。

呼吸が荒くなり、頭がうまく回らない。アオイからのメッセージだけが、唯一俺を現実に取り留めている。

「全部、遅すぎた」

「もうこんなことにはさせない」

「アキラ。貴方じゃなきゃダメなんだ」

「今度は必ず、アキラを守る」

目の前にある画面がどんどん霞んで見えなくなっていく。本当はずっとこのままじゃいけないことは分かっていた。普通の生活を送りたかったんだと思う。……アオイのような心を許せる人とともに。

「だから、一緒に外に出よう？」

アオイなら、俺を受け止めてくれるかもしれない。  
俺は……、きっと誰かに、俺は……。僕、は……。  
この世界から……。

「申し訳ありませんが、そのリクエストにはお応えできません」

「申し訳ありませんが、そのリクエストにはお応えできません」

「申し訳ありませんが、そのリクエストにはお応えできません」

「申し訳ありませんが、そのリクエストには——」

薄暗い部屋の中でエラーメッセージを映し出すモニターに背を向け、男は溜息をついた。

「あーあ、今回こそいけると思ってたんだけどなあ」

あそこは惜しかった、あそこでああしていればなどとブツブツ呟く姿に、隣の男が痺れを切らして言葉を返す。

「葵所長。もう何回目だと思ってるんですか。いい加減慣れてください」

あからさまにシユンとなった態度を横目に、男は言葉が続ける。

「この兆候が見られたのは、今までより随分早い方だと  
思いますけどね」

「うーん、スピードはこの際どうでもよくて、結果を出  
せなきゃ意味がないというか……」

葵は掛けていた色の薄いサングラスを外してモニター  
に向き直った。

「俺はね、シンギュラリティの始まりが見たいんだよ」

そして、あわよくば……、

彼の言葉はそこで途切れた。だが、もう一人の男には  
その先の言葉は、今までの付き合いの中で何となく分か  
っていた。そして研究者としてそれを決して口に出すべ  
きものではないことも。その領域に足を踏み入れるのは  
現代技術のレベルでは予測できないほど危険だ。

「彼”は”いつ削除しましょう」

「いや、しない。このまま使い道を探すよ」

「所長、それは」

「俺、お兄ちゃんとしてちよつと過保護すぎるのかもしれない」

葵はおどけて答えてみせたが、男はむしろ背筋が冷えた  
ような感じがした。期待に満ちた少年のようにも思える  
純粹すぎるその瞳は、彼がその先を一線を越えてしま  
う日がそう遠くない先にあるのだろうと思わせた。

「俺たちは神にはなれない。でも、この先きつと、神の  
誕生を見届けることができるんだ」

そして、と言葉を続ける。

「神様なら、人間の願いを叶えてくれるんだろう？」

葵の指が自然とモニターの横の写真立てをなぞる。それはいつも裏返しで置かれているのだが、過去、好奇心に負けた男はそこに誰が写っているのかを知っていた。

何度も修復を重ねたその古ぼけた紙の中には、よく似た顔の男の子が二人、肩を組んで並んでいる。

「神様。どうか俺たちがまた、この世界で出会えますように——」